

服部英二著

『未来を創る地球倫理―

いのちの輝き・まじりの世紀へ

Towards a new Global Ethics』

谷口 茂

本書は著者が二〇〇七―二〇一二年の間に、様々な学会、研究会などに招かれて行った講演の記録に基づくものである。各章が主催者の招請に具体的に応えたものであるから、各々が独自の目的をもって行われたものである。この本の紹介、書評を試みるに当って、私（評者）は本書の題名に焦点を置き、各章が著者の構想する「地球倫理」にどのように貢献しているかを考察する立場を取ることにした。

第一章「言葉のいのち―国際言語年にあたって」。この章は二〇〇八年の第九五回日本エスペラント大会公開シンポジウム「国際言語年から考える言語の多様性と対

話の文化」における著者の基調講演に基づくものである。著者は自らの基本的立場を、ユネスコの「文化の多様性に関する世界宣言」（二〇〇一年）から発した「多様性こそが人類の世界遺産である」との認識に立ったものと表明する。多様性は言語と文化にかかわるものだが、それは生物的多様性と無縁ではない。

次いで著者の言語観が、言語は本来「民族の魂」であり、「文明のDNAを継承する」ものと語られる。現況では、しかしながら、世界に認められる六〇〇〇―七〇〇〇の言語が今世紀中に半減の危機に瀕しているという。言語の衰退をまねく要因は「民族国家の誕生と言語の政治化」であり、一つの言語が他民族を統一するための道具となるとき言語が「政治化」したと呼ばれる。この動向に対抗して著者の推奨するところは（一）「自国の文化の真底に触れる」「自国語の完璧な習得」であり、（二）二カ国語以上の多言語教育、（三）最も大切なこととして、他者の文化に敬意を払う「互敬」の精神の涵養である。

骨組を追うと以上のように捉えることが

可能かと考えるものだが、これでは著者の講演の緻密さ、材料の多様さ、判断に伴う重量感、そして何よりも聴く楽しさが伝わらない。それは著者の魅力が独特の学風によっているからである。この学究（哲学者、文明学者）に際立つ研究方法はフィールドワークである。長年に亘って幾多の文明のパワースポット（文明の交差点）を訪れ、そこで歴史に会い、文明の物語を聞き、人々と謙虚に対話を重ね、自らの思索を深めてきた。後の章で語られることだが、彼がユネスコのシルクロード「対話の道」総合調査を立案し、これに責任者側として長年コミットしてきた。これに就いて三〇ヶ国三〇以上のシンポジウムやセミナーが生まれ、二〇〇〇人以上の学者が参加したという。こうした現場での豊富な出会いが彼の学問と人間力の基礎にある。彼の講演、およびそれに付随するコラム記事は、こうした土壌に深く根をおろして咲いた花であり、彼のユネスコの、地球倫理的パーソナリティの果実である。

著者のいう地球倫理とはいかなるものか。これに対して第一章が貢献するものは

何か？ 一般的に考えてみて、地球倫理の実質をなす構成的要素・要件というものはあるであろう。そして、それにどのような追っていかかという認知的要件または作法といったものがあるであろう。第一章はまず、「多様性こそが人類の世界遺産である」という哲学が地球倫理の構成的要素であることを示している。次いで、著者の推奨になる言語の衰退化対策の三つの事項を認知的要件にかかわるものと位置づけてみよう。但し構成的要素も認知的要件も評者が仮に立てたもので、両者は補完の関係にある。

第二章「ユネスコと文化の多様性」。この章は二〇〇七年の東海大学文明研究所第九回コアプロジェクト・講演会における講演に基づくものである。ここでは大掴みに言って二つのテーマが語られる。第一のテーマは、ユネスコによる「文化の多様性に関する国際条約」の成立（二〇〇五年一〇月）に至るまでの長い道程であり、第二のテーマは「普遍」と「通底」に関するものである。

著者はユネスコの原点をなす「知的協力委員会」（新渡戸稲造が幹事の任にあつた）の精神を継承し、「人の心の中にこそ平和の砦を築かねばならない」というユネスコ憲章に照らして「文明間の対話」を発想し、一九八五年に「シルクロード調査計画」を立案した。爾後のユネスコの様々な活動は、当初馴染まなかった「文明間の対話」というキーワードがいかんにして市民権を得て国際年に位置づけられるまでに至ったか（二〇〇一年）を物語る。同時にユネスコが直面し、対処していく「世界遺産」、「生物多様性と文化の多様性の有機的結合」、「市場原理」、などといった問題にこのキー・コンセプトがどのように関わっているか、「文化の多様性に関する国際条約」が成立（二〇〇五年）をみるに至ったのか。この章は刺激的なドキュメンタリーである。

しかし著者はここで良しとして停まることはできなかつた。この条約は、使い方によっては各文化が自国のアイデンティティに閉じこもる際の盾ともなりうるからだ。著者が次に提唱したことは、「普遍から通底への意識改革」であり、国際シンポジウム「文化の多様性と通底の価値―聖俗の拮抗をめぐる東西対話」（二〇〇五年）の実現であった。「通底（トランスヴァーサル）」は仏の哲学者にして彼の職場の先輩にも当るロジェ・カイヨワの導入による語だそうだが、ここに展開される通底論が「普遍」に下す断罪は、「人間の全人性の喪失」をもたらし、女性・子供・非西欧に対する「差別の原理」を結果し、さらには「啓蒙主義による世界制覇」の元凶となつたと、余すところがない。対して、通底とは「異なつたものが異なつたままにお互いを尊重しながら、根底で響き合うものをもつ」ということであり、同時にそれは「響き合い」でもあると示される。また通底の世界は論理学という「排中律」の世界ではなく、「包中律」つまり相即の関係において成り立つものだと言われ、また「通底的なアプローチ」は比喻によって語られ、「和して同ぜず」、「和音」、「曼荼羅（まんだら）」、ゴッホの「ひまわり」に例えられる。

地球倫理とは何かと尋ねる評者の視点からみると、第二章は地球倫理の根本的構成的要件は、人類の叡智としてのユネスコ精

神の祖述にある、つまりその継承と発展にあることを明示している。その精神は無知の壁を解消する「知的協力」であり、人の心の中に「平和の砦」を築くものである。「通底」は地球倫理の重要な概念であるが、各文化が他と通底するものをもつという

ことでは地球倫理の構成的要件であり、同時に「響き合い」を感得するといふとき認知的要件の側面を持つ。なお通底に関しては第六章「普遍から通底へ」を参照していただきたい。本講演の三年後の講演で、論考がさらに拡げられ、「通底」は地球倫理の方法論としても位置づけられている。

第三章「イスラム文明の対話」。この章は二〇〇九年のモラロジ研究所における講演に基づくものである。評者はこの章を文明間の対話のケース・スタディと位置づけてみる。これは地球倫理的視点から見たイスラム論である。著者はハンチントンの「文明の衝突」論の誤りを正し、ついでイスラムを消し去った西洋中心の文明史を取り上げ、その根本に「人間の尊厳を損なう正義の欠如、すなわち不正」があると断

じる。著者が世界史における「知られざるイスラムの貢献」を力説するところは圧巻である。この貢献の無視こそがイスラム原理主義者の心中に（無意識のうちに）「恨」を残し増幅させてきたのだと指摘する。

違いばかりが目立つような日本とイスラムだが、著者は根本的な次元で両者に一致点があるとして、「神が万物に顕現している」という思想を挙げる。それはイスラムの「タウヒード」の思想であり、華嚴の相即、天台本覚論の悉皆成仏であり、日本の神々が「現し身」となつて一者を透視することに通ずるものと指摘する。根源において通底するものがあれば対話は開ける。二〇〇二年以来「日本―イスラム文明間対話」が続いており、「世界宗教の対話会議」や「平和の文化」シンポジウムの開催に貢献しているという。

第四章「激動する世界と日本文化」。この章は二〇一〇年のモラロジ研究所における「モラロジ研究発表会」での講演に基づくものであり、世界の現況の中で「日本文化の存在意義」とは何かを論じてい

る。地球倫理の視点からみれば、世界に蔓延する政治経済の激動も、さし迫った環境問題も、共に同根に発する現象で、現況はまさに地球文明そのものの危機と捉えられべきである。これを現実的に探究していけばその元凶は市場原理とグローバリゼーションに辿り着く。このグローバリゼーションが価値の単一化を生み、世界を席卷して著しい精神性の欠如を伝播して今日の地球文明の危機を招くに至った。著者は、今必要なことは「価値観のリセット」によつて市場原理主義からの脱却を図ることであるという。それにはまず前段階として、科学革命がヨーロッパのみに生じた理由、科学革命を経て出来上がった近代文明の本質、そして世界で唯一と思われる文明、すなわち物質文明・力の文明の出現に至つた経過を知らなければならぬ。これは著者の文明史観にかかわり、従つて随処に現われるテーマだが、著者は人類発生から現代までをマクロに掴んで著者ならではの気魄のこもつた立論を提示する。

さて、「価値観のリセット」であるが、人類はどこに新たな価値を見出すことがで

さるのであるうか。著者は東アジアの豊穡の三日月地帯の生命観（日本も一員としてそれを共有する）を力の文明に対峙させ、ここに全く新しい「いのちの文明論」といえるものがあると宣言する。その核心は母性原理であり、その定義は「いのちの継承を究極の価値とすること」である。これによって人類は科学革命によって失った全人的人間像を回復できる。市場原理主義による人間精神の砂漠化を食い止め得る。そして、この文明の荷い手としての日本を早くから認めていた世界の叡智からの強い期待を示すものとして、アインシュタイン、トインビーらの言葉が紹介されている。

第五章「新しい地球倫理を問う」（二〇一一年に全国日本学士会誌『ACADEMIA』一七八号に発表されたもの）。第七章「科学知からの総合知へ——人類生存の課題」（二〇一二年のモラロジー研究所における講演に基づくもの）。この二章は本書の標題に直接答える核心部分を構成する。第五章冒頭に、地球システム・倫理学会が、二〇一一年三月の東日本大震災の一ヶ

月後に世界にむけて発信した緊急声明「国連倫理サミットの開催と地球倫理国際日の創設を訴える」が掲載されている。これは、当学会長の任にある著者の名を以って発信されたもので、世界から期待を上回る熱烈な反応を得ているという。この声明文のなかに地球倫理の実質を構成する理論体系の骨子が明示されており、この章と第七章はその詳説に当てられていると言つて良いであろう。地球倫理とは何か。それは「地球と人類の未来を真剣に考える」ものであり、具体的には文明のパラダイムの転換を目ざすものである。一七世紀以来の科学文明、人類を破局に向かわせる「力の文明」、その原動力たる理性至上主義の「父性原理」——これを、いのちの継承を至上の価値とする「母性原理」に基づく「いのちの文明」に転換することである。従つてまず科学文明の出自と本質を厳しく暴き、これに徹底的な批判を加えねばならない。そしてどのようなパラダイムが「すべての民族が分かち合える」未来の地球倫理を荷うべきかを提唱し、かつその啓蒙に当らなければならぬ。このような研究と活動が

地球倫理の実質を構成するものである。

第七章は二〇一二年六月のモラロジー研究所における講演であるが、これは同年三月の東京大学総長室企画による「人文知・社会知からのサステイナビリティ」というシンポジウムにおける著者の発表を基にしたものである。地球倫理の構成的要素・要件と地球倫理に迫る認知的要件を訊ねる評者の立場から見ると、第五章が構成的要素を主として論じているのに対して、第七章は後者の要件についてより多くを語っているように思う。

人間はいかにして近代文明を築いたか。著者は伊東俊太郎の五大革命説に準拠しつつ一七世紀の科学革命の本質を明らかにし、一八世紀にピークを迎えた啓蒙主義と理性至上主義を語る。理性至上主義によって科学は進み、物質文明は大きく進歩する一方で、「所有」の価値観が「存在」を圧倒し、人間の知はひずみを来たし、人間はついに総合的な「智」を失うに至った。現在人類は所有の文明の極みの中にある。以上の文脈にあって、著者は人類が採るべき真実への迫り方、地球倫理の認知的要

件を提示する。第一に、主客の二元論に基づく科学的アプローチを採らない。それは実体の一面を細かく観察しても、内側をも含めた総体的な知を生まない。第二にそれは排中律の横暴を許さず、「包中律」を採る。排中律は間を考えないが、人間の深層は間を生きている。これは哲学的に進めば「一即多」「色即是空」の相即の世界観に通ずる。これを「実体は複数の次元を持つ」と表現する人もいる。第三に、人間は全人性を取り戻さなければならない。「感性や霊性と響き合う理性」を取り戻さなければならない。第四、総合知こそが未来を拓く、それを可能にするのは領域横断的なアプローチである。第五、そして人は全人的な人格の養成に務めなければならない。その人の言は真理と倫理の合一を含み、その人の全人的な人格の力が他を動かしていく。著者は彼の地球倫理が自己形成の途上にあることを示唆している。例えば講演の中で、ヘブライ・キリスト教のゴッドに代わる「新たな神」あるいは「至高の存在」という概念を再考することを近未来の課題とし、また「いのちの文明」への転換を説く

なかで、その内実を深めていくことを今後の課題としている。「地球システム・倫理学会設立趣意書」によれば、この学会が意図するところは危機的な様相を呈する地球問題群に立ち向かう大プロジェクトである（構成する四つのシステム（体系）領域は1. 生命、2. 環境、3. 文明、4. 文化）。本書は、この学会のファウンディング・ファーザーズの一人である著者によって書かれた「地球倫理とは何か」という問いに対する応答である。彼は地球倫理の実質とその方向性を提示した。「すべての民族の意識を地球倫理へと覚醒させたい」とする著者の想が一層多くの心に響くようにと願うものである。

〔モラロジー研究所、二〇一三年〕